

論文内容要旨（甲）

The assimilation of The Indicators used in “Healthy Parents and Children
21” and an Analysis of The Indicator Framework

（「健やか親子 21」の指標の現実反映と枠組み分析の試行）

The Showa University Journal of Medical Sciences, 2018. 掲載予定

医学部法医学教室 金 成彌

内容要旨

【背景】すこやか親子 21 は具体的数値目標を持つ日本で初めての国民健康運動である。平成 13 年度から施行され現在も進行中である。第一次は終了し平成 25 年に最終評価が公表された。その評価は各数値目標をもつ指標の経年の変化のみを考慮しており、大半は改善したという報告がなされているが、改善の実感がわいていないという意見もある。そこで本研究では健やか親子 21 について政策が現実には反映しているかを評価した。

【方法】初めに多変量多変数ロジスティック回帰分析（線形混合効果モデル）を用いて政策効果に寄与する指標を調査した。次に法医学的見解の下で、児童虐待を評価する指標について、指標が現実を正確に反映しているかどうかを検討した。

【結果】ロジスティクス回帰分析の結果、課題 1 「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」は、保健水準の指標枠組みに対する行政・関係団体の取り組みの指標枠組みの貢献度は非常に低かった（オッズ比 = 0.041, 95%CI: 0.002-0.703）。課題 3 「小児保健医療水準を維持向上させるための環境整備」では、住民自らの行動指標の変化は負の関連性を示した（パ

ラメータ推定 $= -1.63$, 95%CI: $-2.64 \sim -0.62$)。児童虐待を評価する指標の内「児童虐待による死亡者数」は採用値(厚生労働省研究班)と公表値(警察庁)の間に乖離を認めた。

【考察】健やか親子21(第一次)の指標は3つの階層構造「保健水準の指標」「住民自らの行動指標」「行政・関係団体の取り組みの指標」をとり、経時変化し、5段階評価が行われているという特長を持つことから、多変量多変数ロジスティック回帰分析を行うのに適したモデルであった。解析結果からは課題1「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」は、保健水準の指標枠組みに対する行政・関係団体の取り組みの指標の貢献度は非常に低く、行政レベルにおける思春期のヘルスプロモーション再考の必要性が示唆された。また課題3「小児保健医療水準を維持向上させるための環境整備」では、住民自らの行動指標の変化は負の相関性を示し指標自体の再考の必要性が示唆された。また、指標の評価自体、公表値と採用値間に乖離を認めるものが存在した。児童虐待による死亡数の公表値と採用値の乖離原因は、嬰兒殺や心中による死亡も含むかどうかにある。このように採用基準によって結果が異なってしまうことも今後のモデル構築の際の考慮に値する。実際健やか親子21は第2次が進行中であり、指標の設定で考慮されているのは主に経時の変化のみである。第2次の最終評価において同様にロジスティクス回帰分析を行い今回の解析と同じ結果となるならば、経時の変化だけでなく、3階層の指標相互の関係性も考慮した指標作成が必要であると考えられる。

【結論】日本の国民健康運動「健やか親子21」の指標のロジスティクスモデルを構築することで政策の現実への反映を評価することが可能であった。